

第5分科会

気になる子や障がいのある子の 保育実践と家庭支援

| | |
|-----------|----------------------------------|
| ディレクター名 | 大谷 喜久子 (みちる幼稚園) |
| 司会者名 | 楠見 由紀 (桂幼稚園) |
| 運営委員名 | 油田 美沙 (金石幼稚園) |
| 話題提供園名 | 梶田 由依 (はなの木幼稚園) 杉本 愛 (藤山台幼稚園) |
| 助言者名 | 齋藤 善郎 (椙山女学園大学 教授) |
| 分科会担当責任者名 | 石倉 巧美 |
| 会場 | パレブラン高志会館 |
| 参加人数 | 175名 |

【発達の偏りに対して、園や家庭でどのように 対応したらよいか考えよう】

子どもが発達するとはどういうことを意識するのでしょうか。心身の成長を足がかりとして、生活の中で、いろいろなことができるようになっていくことを示しています。しかし、そこには個人差もありますし、個人差の範囲をこえて、発達が偏っていることもあります。

園の生活で気になる子というのは、この偏りが目立つ場合や情緒的に配慮を必要とする場合が少なくありません。では、どのように配慮をしたらよいのでしょうか。園の保育者、保護者、そして、それを取り巻く子どもたちやその保護者、この研修では、そうした周囲の人々がどのような関わりをもつのがよいのかを一緒に考えたいと思います。一番、困っているのは「幼児本人」です。その困り感に、どのように向き合っていくか考えてみましょう。

【研究の手がかり】

- 保育者は子どもの思いを、どのように受け止めようとしていますか。
- 子どもが過ごしやすくするために、園ではどのような配慮をしていますか。
- 子どもの育ちのために、保護者と手を携えるには、どのような配慮が必要でしょうか。

話題提供 はなの木幼稚園 梶田 由依

【I君について】

- ・入園前、市の療育施設に通っていた。
- ・家庭構成:本児、父、母、7月に妹が生まれ 4人家族
- ・保護者はI君を心配している。

【入園当初の様子】

- ・挨拶をして元気に登園するが、玩具に一目散
- ・友達には全く興味を示さず、身の回りの事はほとんど一人で言うことができるがいろいろなことに気が散り、集中力に欠ける。
- ・自分の好きなことは話せるが、ほとんどオウム返しである。

【身支度において】

登園後、身支度が自ら取り掛かれない。どのように援助をしたら良いか。

○作戦①シール作戦→シールを貼ることが楽しめるように声を掛ける。

○作戦②友達作戦→周りにいる子供たちが身支度をしている子と、どっちが早くできるか競争する声掛けをした。

⇒その結果、全く興味を示さなかった。満足がいくまで遊び見守るようにしていった。単に遊びに夢中になっているのではなく、I君なりの思いがあってではないか。

○作戦③車庫作戦。大好きなバスの玩具を大切そうに抱え込んで遊んでいる→ブロックでバスの車庫を作り、一緒にしたくしよう。興味を示した。

〈個別の援助〉玩具は出さずに、本児が身支度に集中して取り組める環境を作った。流れが覚えられるように一つ一つわかりやすく声を掛けた。出来たことには、その都度スキンシップをとり大いに褒めていった。身支度を積極的に行おうとする姿が見られるようになった。

【気になる行動①】

- ・上靴を履くことが苦手とその都度パニックになることが多い。
- ・長時間履いていられず、左足の上靴を脱いで持って遊んでいる。

〈個別の援助〉上靴の後ろの部分にゴムを付けまらずは一人で履きやすいようにし、なぜ履くべきなのか靴下で保育室にいると滑って危ないことを知らせ、繰り返し伝えていくようにした。

他児を見せるとともに、履いているときには褒める。

→上靴を履いて過ごすことができるようになった。

【気になる行動②】

- ・身の回りのことは一通り行うことができるが、突然パニックになる。
→落ち着けるよう声を掛け、手を添えながら一緒に行くようにする。なかなか気持ちの切り替えができず、泣き続ける。

【考察】周りの状況や本児の目線・表情から周りの子の支度がすでに終わってしまい遅れていることに気が付いた時パニックになっている。

〈個別の援助〉

- ・全体が身支度に取り掛かる前に本児に声を掛け、集中して取り組めるように配慮していった。
→落ち着いて身支度を進め、一人で行うことができた。現在の姿は、頑張っていて自分でやろうとしている。

〈個別の援助〉

- ・周りの友達がやっているところを見せる。
- ・一つ一つ手を添えながら一緒に行くようにする。
- ・保護者と連携し、その都度報告・連絡することで、徐々にできることが増え、指示が通るようになってきた。

【K君について】

- ・4月から初めての社会生活
- ・家族構成：本児、父、母、弟の4人家族
- ・保護者は本児について、特に心配している様子は見られない。

【入園当初の様子】

- ・入園当初より泣かずに登園するが、表情の変化が見られない。
- ・多くの事を自分でやる経験が少ない。
- ・集中力にかけ、一つの行動に時間がかかる。
- ・単語や二語文で話すことが多い。
- ・白米以外は口にできず、偏食が見られた。

【気になる行動】

- ・色々なことに興味津々で、すぐに他事に気が散ってしまうので、一つ一つ手を添えながら一緒に行くようにした。
- ・同時に二つのことを伝えてしまうと、頭が混乱してしまう。

〈個別の援助〉

- ・一つずつ分かりやすい言葉で伝えていく。
- ・本児のペースに合わせ傍で見守り励ます。
- ・できた時は大いに褒める。

【身支度において】

- ・身の回りのことを一人で行うことが難しい。
- ・簡単な言葉での指示が伝わらない。「上靴」という言葉が分からない。家では「シューズ」と呼んでいる。

- ・一つの事を集中して行うことができず、何か気になることがあるとあちらこちらへと歩き、指示が全く伝わらない。

【給食において】

- ・自分で食べることが難しく、口を開けて待っている。
- ・スプーンとフォークの扱い方が分からない。
- ・コップから直接飲むことが難しい。
- ・咀嚼することができず飲み込んでしまう。
- ・白米のみを好む。

〈個別の援助〉

- ・まずは色々な食材に触れ、経験できるように援助する。
- ・食べられたことを褒め、食事の時間を楽しめるよう働きかける。
- ・保育者も噛む真似をし、一緒に噛む練習をする。
- ・保護者と連携し、家でも噛んで食べられるように意識してもらうようにしてきた。

【まとめ】

- ・その子のペースに合わせた援助や環境づくりをする。
- ・大きなリアクションで褒め、自己肯定感を高める。
- ・初めての経験が多い分つまづくことも多いが、できるようになった姿が見られ、成長も著しく大きく成長する。
- ・一人一人の気持ちを受け止め、その子の持っている力を最大限に伸ばすことが保育者としての大切な役割である。
- ・保護者と連携し一緒に成長を見守る。
- ・K君のつまずきや困っていることに気づき、できるようになったことを感じる事ができた。
- ・子供たちの無限大のパワーを受けられることができる、最幸の仕事であると実感した。



話題提供 藤山台幼稚園 杉本 愛

【Aくんについて】

- ・ 4月から年長に進級
- ・ 家族構成：本児、父、母の3人家族
- ・ 診断名は、自閉症スペクトラムで、週2回療育に通っている。

【年少時の姿】

- ・ 部屋に入ることがなかなか出来ない。
- ・ 身支度など身の回りのことに集中して取り組むことが難しい。
- ・ 電車や車で遊ぶことが好き。また、体を動かすことが好き。
- ・ 遊びからの切り替えが難しい。

【年中時の姿】

- ・ 年少時と担任、補助教諭、園舎が変わった。
- ・ ダンゴムシ探しに夢中。乗り物やブランコ大好き。活発な砂場遊び。
- ・ 遊びからの切り替えが難しく、なかなか保育室に入れない。

初めての進級で環境が大きく変わったが、すぐに自分の先生、自分の部屋ということは意識していた。年中では登園から身支度をして遊ぶという流れをまずは大切に関わっていった。7月頃から友達の実存も大きな刺激となり、自分で部屋に向かって身支度をするというリズムになっていった。

【年中時の運動会】

年少児の運動会は欠席しているため、初めての運動会。Aが取り組むものを順番に知らせることで、耳を傾けていく姿がみられた。待っている時間が難しい姿があり、大好きな魚の指人形や水族館、海の絵本を見ながら過ごしていった。本児の姿を予想しながら、本児が無理なく楽しんでいることへ取り組めるようにということを大切にしていた。

2学期、運動会や作品展で環境や生活のリズムが変わり、落ち着かない姿がみられるようになった。療育の先生から一日の見通しがもてていないことがその姿につながっているかもしれないとアドバイスをいただき、字とイラストで一日の流れがわかる表を作り、本児が一日の見通しをもてるよう知らせていくようにした。すぐに切り替えて活動に取り組むということは難しかったが、本児が朝自分で見て、今日は〇〇と何があるかを意識する姿がみられるようになっていった。

【年中時の生活発表会】

集中して取り組むことが難しいため、劇遊びのお話に間ができたり楽器を鳴らさずに待つ

たりすることが、本児にとっては何をしたいかわからないということにつながり、劇中に大道具を倒したり演奏する前に楽器を鳴らしたりという姿がみられた。練習も当日も本児のやりたい気持ちを一番に大切に、やりたい役ややりたい場面は全部できるように援助していった。当日は緊張や不安から落ち着かない姿もあり、補助教諭が一日ピッタリ一緒にいるということが多くなり、その姿にお母さんが、先生が付いていないと何もできないとショックを受けられた。また、発表会后頃から思うようにならないと友達へ手が出てしまう姿もみられたことからお母さんは不安を感じられ、2月28日に病院受診。病院の先生から、いけないことへは知識として知らせていけるように本児と約束をする援助へ、また、活動の参加は本児が周りを見て感じて意識をもっていけるような援助が大切だとアドバイスをいただき、翌日から援助を変えていった。

【年長時の姿】

- ・担任は持ち上がり、補助教諭と保育室が変わった。
- ・クラスや学年での活動の幅が広がり、取り組みの時間も増えた。

・遊びからの切り替えの苦手さ
・クラスや学年での活動を通して充実度のバラつき
・集中できる時間の短さ



分かりやすく伝えるための援助
環境構成の工夫
・一日の流れの視覚化
・運動会のダンスの導入
・誕生日ボードの工夫

【家庭支援】

援助の伝え

- ・全家庭に対して、毎月末に「すくすくのびのびふじやまだい」（通称すくのび）の配布。
- ・育ちや成長の様子、具体的な援助等を写真とエピソード記録を通して伝える。

お母さんの焦りと不安への寄り添い

- ・お迎え時、電話、個人懇談等を利用してコミュニケーションをとる。
- ・児童相談センターの発達相談、病院受診に園の職員も可能な限り同行。

本児の発達状況を様々な方法でつかむ努力

- ・保健師、医師、心理・作業療法士といった専門の知識をもった方々との連携
- ・連携内容について全職員に伝達
- ・支援の必要とする子どもたちを念頭においた環境構成
- ・行事を通しての集団の中で成長を助ける援助



Aを理解していこうとする保育者や保護者の柔軟な心と行動が、周りの子どもたちのAとのつながりを優しく太くし、共に育ちあう教育の現場としての幼稚園になっていけるのではないかな。

グループディスカッション

【3つの柱】

- ◎保育者は子どもの思いを、どのように受けとめようとしていますか。
- ◎子どもが過ごしやすくするために、園ではどのような配慮をしていますか。
- ◎子どもの育ちのために、保護者と手を携えるには、どのような配慮が必要でしょうか。

- ・ 担任だけでは受け止めきれないこともあるので、共有できる先生や助けてくれる（先生の人数の確保）が必要。環境（人や場所）を作ることが大切。
- ・ 保護者との関わりの中で、園での様子を伝える際、なかなか受け止められないことも多々あるが、普段からたわいもない話や懇談会で、保護者が受け止められない気持ちも受け止めるようにし、信頼関係を築きながら様子を伝えていく。
- ・ できるようになったことを保護者に伝え、その後、困っていることを伝える。その上で心配なところがあれば専門機関を勧めている。
- ・ すぐに手が出てしまう子には、その子を見守りたくさん愛情をかけてあげることで情緒の安定につなげている。すぐにダメと伝えるなど、その子に合った対応を探していくのがいいのではないのか。
- ・ みんなと一緒に求めすぎないことも大切。
- ・ いろんな事に否定的にならず、その子のやることにはすべて意味がある。やったことに対して肯定的に受け止め、保育者が否定的になることで、周りの子供たちもその子に対して否定的な印象をもち、居心地が悪い環境になってしまう。否定的ではなく、その子の良い所をいろんな子に伝え、周りの子にとって良い印象がもてるような肯定的な認める関わりが必要ではないか。
- ・ 食事、身支度、生活習慣、人間関係について、いろんな場面を想定して行う。例えば、飛び出していく子には、扉や窓を閉めておく。階段の上り下りが心配な子には保育室の場所を変える。他に居場所を決めてあげる。床にビニールテープを張る。一日の流れをカードに示して視覚的にわかりやすくする。また特別な子に限らず、身支度で戸惑っている子には年長組の子が手伝うことで縦の関係が生まれることも配慮なのではないか。
- ・ 子供同士でスキンシップをとる活動を取り入れ、友達同士で良い所を伝え合う。一人一人のペースを大事にし、特別な配慮がある子もそうでない子にとっても、保育園・幼稚園・こども園・保育者が一人一人のことを考えるということが大事。
- ・ その子に寄り添うために、その子の好きなキャラクターや好きなものを保護者に聞き、キャラクターを使って話をしたり、部屋の一角を落ち着ける場所として作りスペースを確保したりする。なかなか戻ってこない子に対してはストップウォッチ（タイマー）を使ったり、小さなステップで出来るようなことを少しずつ増やし、いろいろ試してみたり、失敗しても別の方法を探ったりして諦めずにする。
- ・ 一日の流れや身支度の仕方を視覚的に表示してみる。例えば帽子を被る時に持つ場所にマークをつけてみる。文字が読めるといって、視覚的な配慮として文字で伝える事をすると、文字を読むことが優先してしまっと思うような対応が出来なかった。
- ・ 配慮が必要な子がいることで周りの子への力にもなる。年長には難しいこともあると子供た

ちに伝え、保護者にも伝えるなど、保護者同士で話し合う場を作っている園もある。保護者へは信頼関係を築きながら徐々に伝える。直接病院へ行ってくださいではなく、言葉の教室などから施設、病院へ繋げている。

- 気持ちをうまく伝えられない子には、気持ちが分かる椅子（困った・怒ってる・泣いてる）を用意することで、気持ちを聞きながらその子に寄り添っていく。
- 障害の受容の難しさとして保護者の困り感がないことや保護者が受け入れられない、認めたくない気持ちがある。園の取り組みとして保育参観とは別に、保育参加があり、一日一家庭の保護者に来てもらって保育を見てもらう。保育参観だと普段と違う姿になってしまうが、保育参加だと園での姿、困っている姿、園と家庭との違いが分かり普段の姿を伝えやすい。
- 療育の方が園を巡回して気になったことを保護者に伝える。園の臨床心理士や市の保健師、担任を交えて話す機会を設けている。
- 集団の中で気になる姿を早い段階で伝えていくことが大切。
- 話に割り込んでくる子には、今は先生の話聞く時。先生の話が終わったら話す時間だと伝えると、見通しがもて、気持ちが安心することにつながる。見通しもつためには絵カードで示す方法もあり、イラストではなく自分の物の写真だとより効果的である。
- 園・小・中まで連携をしっかり取っている。個々にファイルを作り小学校・中学校まで、長い目で子供の支援を考えている。担任や園長、主任、そして、直接専門の先生に話を聞く機会がある。担任や園だけでなくたくさんの地域の人の目で子供を見ている。
- 配慮が必要な子の保護者は不安が大きいので、毎日のお迎えの時、日々の子供の成長段階を細かく伝えていくことが保護者との信頼関係を築くことにつながり相談してもらえるようになるのではないかな。



質疑応答

○質疑 愛知県 近藤先生

・(はなの木幼稚園へ) Iくんが入園前に市の療育施設に通っていたという話であるが、相談にはいつ行ったのか。3歳児健診の時なのか。また、現在はなの木幼稚園に通園してからも、市の療育施設に通っているのか。

- ・(藤山台幼稚園へ) Aくんの自閉症スペクトラムというのは、いつ診断されたのか。
- ・家庭支援で、全家庭に対して毎月末に配布しているという通称すくのびというものは、A4サイズで何ページなのか。写真は一人ずつ違う写真なのか。
- ・児童相談センターの発達相談、病院受診に同行する方はどなたなのか。

応答 はなの木幼稚園 梶田先生

・Iくんが療育施設に通うことは、3歳児健診でということではなく、お母様がIくんの様子を見て、I君は少し援助がいる、手がかかるといことでお母様から相談に行かれ、入園前の半年間、幼稚園に行くために集団に慣れるための練習ということであった。今は幼稚園だけで様子を見ているが、療育施設の先生が1学期の6月頃幼稚園にIくんの様子を見に来て、話もした。I君の成長にも気付いたり、入園前の様子なども聞いたりして、情報を共有することができた。

応答 藤山台幼稚園 杉本先生

- ・診断名が出たのは、初診で2月28日に病院を受診した時である。
- ・すくのびは、A4サイズで、半分位が一枚写真、そしてエピソードと育ちの様子を担当が書いている。おうちの方からのコメント用紙も1枚入れて、おうちの様子も教えていただいている。写真は、一人一人遊びの様子が違うので、お母さんに伝えたいという瞬間をなるべく撮るようにしている。でも仲良しのお友達と遊んでいる時は2人同じ写真のこともある。
- ・児童相談センターや病院の方へは、主任か園長が同行し、幼稚園の様子も伝えている。

○質疑 助言者 齋藤先生

・普段どのような時間に子供たちのことを話し合ったり共有したりする場を設けているのか。

応答 はなの木幼稚園 梶田先生

・保育後に、職員室で自然にそれぞれの先生が必ず何かのエピソードを話している。お互いに共有し、子供たちができるようになったことや援助したこと、自分の反省なども出たりする。また、その場その時の表情を見逃さずに、その場で伝え共有することもある。

応答 藤山台幼稚園 主任

・子供の姿の共有は、保育が終わって終礼という形で全員が集まり行っている。また、児童相談センターの発達相談や病院受診に同行した際には、必ずその日か次の日のうちには医師から聞いたことや援助の方法などの情報共有も大切にしている。

○質疑 助言者 齋藤先生

・(はなの木幼稚園へ) Kくんは、入園前は家庭の中でどのような過ごし方をしてきたか。また、お母さんがどのように子供と対応していたのか。

応答 はなの木幼稚園 梶田先生

・入園前のKくんの様子は、3歳児健診では特に何も言われていませんとお母様から言われた。お母様は、Kくんはまだできないというふうに思っている部分が大きくて、全部やってしまうというように育てられたのではないかと思う。

○質疑 福井県 山本先生

・(藤の木台幼稚園へ) Aくんの今後、小学校に向けてどういったお話をしているのか。

応答 藤山台幼稚園 主任

・療育施設との連携、また、定期的に受診が入っている。市の就学相談が9月にあり、園で就学指導員の方にまずAくんの様子を見ていただき、保護者の方の聞き取りと、保護者の方が帰られた後、もう一度園の様子も口頭で伝えて、就学指導委員会というところに持ち帰っていただいて、12月位にAくんの就学先が決定という流れになっている。

○質疑 愛知県 松本先生

・先生方はできないことができるようになったことをその子理解として見ているのか、療育心理士など専門の先生方のお話も聞いてやっているのか、園としてどのように関わりをもっているのか。

応答 はなの木幼稚園 園長

・今は市の巡回だけで対応して、気になるお子さんを臨床心理の先生に見ていただいている。アドバイスをいただいたことを教員同士で共有しながらやっている。専門家の意見、先生の話も聞きながらという形でやっている。

応答 藤山台幼稚園

・病院の先生のアドバイスをいただいて、それを実践してやっていっている。そして、Aくんの姿からもこうやってするといいんだと実感しながら関わっている。Aくんの苦手な所を理解しながら、難しいことは先生が手伝ってあげたり、できるところを一緒に楽しんだりというような援助をしている。

○愛知県 伊井先生

・(藤山台幼稚園へ) A くん我的生活発表会のところで、補助の先生はどのような関わりをしていたのか。

応答 藤山台幼稚園 杉本先生

・他の子が頑張っているところに影響がないように、補助の先生が付くという形で練習から進めていた。当日はAくんもすごく緊張をしていて舞台裏では補助の先生や他の先生の膝の上に座っていた。補助の先生もなるべくAくんが楽しんでいるところは自分で出来るようにという援助をしていた。

○質疑 愛知県 兼松先生

・(藤山台幼稚園へ)療育とか病院に同行しているということだが、お母様の方からご希望があったのか、病院からか、園からか。

応答 藤山台幼稚園 主任

・児童相談センターの発達相談は、基本的に園が予約日を取って、心理の先生、担当心理士と日程の調整をして保護者の方には日程を伝えるという方法である。病院も一緒にお母さんやお父さんが抵抗なければ、職員が一緒に行かせてもらうということを伝えると、先生と一緒に行っていただけるなら行きますというように言ってもらえる場合が多い。基本的に病院は初診の時は必ず一緒に行くということと、児童相談センターの発達の相談は必ず幼稚園が日程を取るの、一緒に行くということを大事にしている。

○質疑 福井県 佐竹先生

・発達に偏りが無い子供たちへの、いわゆる偏りのある子に支援をしている中で、逆に先生方がこの子ちょっと特別な支援なんだよということへの子供たちあるいは保護者へのアプローチなどはあるか。

応答 はなの木幼稚園 園長

・行事などをやっているうちになんとなく、周りも自然に受け入れてくれているような状態で過ごしている。普段の中で、その子が悪者にならないようにと気を付けている。

質疑 福井県 佐竹先生

・その子がいることで、周りの子が学びになっているというような、そういった考え方でよろしいか。

応答 藤山台幼稚園

・共に生活していく中でお互いに関わり方を学んでいる姿がすごくある。子供たちや保護者の方に何か伝えることは、特にしていない。

助言者のまとめ

1. 保護者とのコミュニケーション

(1) 障がい受容の難しさ

拒否→否認→哀しみ・怒り・不安→混乱→原因究明→受容

(2) 保護者とともに子どものことを考える保育者の姿

保護者の気持ちを受けとめる … 傾聴することの大切さ

保護者の気持ちを支える … 突き放さない

評論家にならない

保護者の困り感をわかろうとする

子育ての不安に寄り添う

子育ての仕方が悪かったのではない

困った時の手立てを一緒に考える

子どもの成長を伝える … 良いところ探し、モデルを示す

2. 子ども一人一人に注ぐ「温かいまなざし」

(1) 相対評価・絶対評価・個人内評価

幼児の教育で当てはまるのは、個人内評価

それぞれの子どもがちゃんと育っていているという姿を認めてあげる

→ 個人内評価の視点

(2) 安心できる保育環境

安心できる場所が園の中にあるかどうか

安心できる保育者の存在

自分を十分に受け入れてくれる人の存在

愛着の形成

安心できる仲間

子どもたちは保育者を見ている

行動のモデル→模倣行動

安定した一日の流れ

いつもと違う要素を減らす

事前に知らせる一見通しをもつ

長期的に知らせる

(3) みんなと一緒に求めすぎない

個別の指導計画が必要な場合もある

教員同士で共有

3. こんな時には、こんな対応を

あちこち歩き回る

じっとしてられない→動いてよい場面をつくる

周りが気になってしょうがない→気になるものが見えないようにする

→過敏な傾向はないだろうか(例:耳が敏感、こだわりがある)

時には、保育者側がいろいろと考えて、見て、保育を進めていくことが大事

話したくなるとつい割り込んじゃう

人の感情を読み取るのが苦手

「ちょっと待って」を動作やサインで表す工夫

すぐに答えない練習→「ボリューム0ね」「1・2・3と数えてからね」

すぐに手が出ちゃう

カッとなると行動を抑えられない

言葉で言うのがうまくできない

動線上に他の子がいる

欲しいものを他の子が使っている

→ いつも手が出やすいことがあれば、それを把握しておく

けんか

ひどいことを言ったという意識がない

落ち着いている時に、言っではいけない言葉を繰り返し教える

言葉のニュアンスがわからない

例:「ちょっと見ててね」

保育者はお世話してねというつもりでもじーっと見ているだけの子

幼児のもつ自己中心性

自分のものの見方で周りのものを見る

相手の気持ちや思いを理解できない → 年齢が上がっていくと減る

話だけでは分からない(保育に集中できない)

意識が集中しない→個別に指示する

具体的にやってみる

分かりやすいように区切って伝える

(長い文節だと理解できない)

「次は○○をするよ」といわれても行動できない

○○が何かわからない → 他の言葉に置き換えてみると伝わることもある

一度のいくつもの指示は理解しにくい → 指示は分割して分けて伝える

言葉だけよりも視覚的に示す

依存的

自信がない

生活経験の不足 → 丁寧に伝えていく、一緒にやってみる

自己肯定感を育てる…小さなことでもできたという体験を増やす、できたら褒める

ルールが守れない（気づかない）

まずはルールに気づかせる

守った方がいいという必要感があって、初めてルールの大切さに気づく

子供たちは最初から何でも上手にできるわけではない。園にくる中で、いろいろなことがだんだんとできるようになる。それは他の子の様子を見ていたり、時には真似をしたり、時にはぶつかり合いがあったり、このようなことを通して他の子と折り合いをつけて一緒に生活する姿が身についてくる。そしてそれは、一人であるよりも仲間という方が楽しいよね、というような気持ちにつながっていく。これは、少し発達が偏っていたり、遅れていた子供であっても、やはり仲間と一緒にいることで、いろいろなことを真似をして覚えたり、いろいろなことに気づいたり、他の子の気持ちを受けとめたり、他の子から優しくしてもらって心地よい体験をしたり、このようなことで子供は仲間と過ごすことの大切さを身につけていく。